

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今日では誰もが「自由」は最も大切な価値だと考えている。このことにあえて異をはさむ者はいないだろう。だが、同時にまた、今日、自由という言葉はもはや人々の心を揺さぶるような響きを持っていない。人々は自由に飽きているようにさえ見える。

どうしてこうなったのだろうか。果たして、今日、われわれにとって、「自由」とは何を意味しているのだろうか。誰もが、口では「自由の実現」こそが現代の課題だという。□ I、現代社会において、「自由の実現」が課題だというときに、本当のところ何が問題になっているのだろうか。

少し前に二十人ほどの少人数の学生の講義で聞いてみたことがある。「君たちにとって自由は重要なものだと思うか」。当然、全員が「自由は大事なものだ」という。「では、現在、君たちは何かに不自由な思いをしており、自由が※享受できていないと思うか」。すると、ほとんどが「別に問題はない」という。そこで続けて聞いてみる。「では、現在、日本の問題は、個人の自由が侵害されている点にあるのか、それとも、①自由を縛るはずの道徳※規範や※拘束がゆるんでしまっている点にあるのか、そのどちらが問題なのだろうか」。これに対しては、おおよそ三分の二が「道徳、規範が崩壊していることのほうが問題だ」と答えるのである。

□ II、これは、自由とは何かなどという厳密な議論を踏まえたものではないし、各学生の単なる印象に過ぎない。たまたま私の講義に出席した学生がそうした関心の傾向を持っていただけかもしれない。しかしそれでも、自由が侵害されている、自由が享受できていないという※切迫した感じは、今日の日本

の若者たちにはほとんどないといつてもよいだろう。

こんなことなど、わざわざ若者に聞いてみなくとも、彼らを見ていればわかるではないか、と読者はおっしゃるかもしれない。確かに、今日の、とりわけ日本の若者ほど、自由気ままに二十四時間をフル活用で楽しんでいる者はいないであろう。ケータイやクルマやゲームセンターやファミレスなどという小道具や舞台にも事欠かない。

しかし、「自由」はいつも脅かされ、自分が本当にやりたいことができず、何かによって縛られていると感じるのが、□ A、②若者の特権ではなかったらどうか。ここで「特権」というのは、本当は彼らほど社会的に恵まれた立場にあつて、実際上、彼らほど自由な存在はないということである。特に、大学生であることは人生最良の③モラトリアムである。

しかし、にもかかわらず、□ III、だからこそ、若者ほど、自由を徹底的に※謳歌したがる者もいなかったし、※観念的であれ、自由はいつも侵害されているという※憤りを持っているたものであつた。社会的な※しがらみや生計の不安がないからこそ、自由や社会正義のために現状を批判するのが若者の特権であつた。

もしも、実感として「自由」が侵害されていなくなれば、かつてなら、「われわれは※資本主義的な管理システムによって飼いならされている」などという理屈をひねり出したものであつた。□ B「などという一見気の利いたことをいう者もいたはずである。ともかくも、若者にとっては、われわれが生きているこの社会は、人間の自由を抑圧する不合理なものなければならぬのであつた。

ところが、今日の学生たちは、④そのような感覚も理屈も感じないように見える。ついでに、「仮に何かをしたために、

いま、自由が欲しいとすれば、その『何か』とは何なのだろうか」とたずねてみた。ひと通り聞いてはみたのだが、ほとんど答えらしいものは返ってこないのである。これはいったいどうしたことであろうか。

確かに、「自由」が大事なものであることにひとまずは誰もが同意するであろう。しかし、「自由」が現代社会で本当に問題なのかどうかというと、よくわからない。

ということとは、「自由」が、**IV**、本来、人間にとつて第一級の課題だとすると、われわれは今日、その第一級の課題についてもはや強い関心を持ってなくなっている、ということになる。今日の思想の**※**衰退、世の中に対する切迫した関心の衰退、もっといえば**全般的な生の衰弱**といった事態は、**⑤**このことと決して無関係ではないようにも思われる。

（佐伯啓思 『自由とは何か』 一部改変）

※（文中のことばの意味）

- 享受 …… 受け取って自分のものにする。
- 規範 …… 行動や判断などの基準。
- 拘束 …… 行動や判断などの自由を制限すること。
- 切迫 …… 追いつめられること。
- 謳歌 …… 幸せをみんなで楽しむ喜び。
- 観念的 …… 頭の中だけで考える様子。
- 憤り …… 激しく腹を立てること。
- しがらみ …… まとわりつくもの。
- 資本主義 …… 労働者が資金を持っている資産家にやとわれて、ものを生産するという社会のしくみ。
- 衰退 …… おとろえて勢いを失うこと。

問1 **I** **IV** にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア あるいは
- イ だが
- ウ もちろん
- エ もしも

問2 「少人数の学生の講義」での出来事を述べることで、筆者はどのようなことを伝えようとしているのですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 多くの若者は自由の侵害を問題だと考えておらず、自由に対し価値をまったく見いだしていないということ。
- イ 多くの若者は自由の実現を大切だと考えているが、実際に不自由さは感じていないということ。
- ウ 多くの若者が道徳や規範の崩壊を問題だと考えており、自由よりも道徳や規範の方が大切だと考えているということ。
- エ 多くの若者は自由の侵害を実感していないが、それは単なる印象に過ぎないということ。

問3 線①「自由を縛る」とありますが、「自由を縛る」ものとして**ふさわしくないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 道徳
- イ 生計の不安
- ウ 社会正義
- エ 管理システム

問4 Aにあてはまる四字熟語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 古今東西
- イ 老若男女
- ウ 言語道断
- エ 十人十色

問5 線②「若者の特権」とありますが、「特権」といえるのはなぜですか。その理由を二十五字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問6 線③「モラトリアム」とありますが、どういう意味ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 気ままに行動するための道徳規範。
- イ 社会に出て一人前になるまでの準備期間。
- ウ 自身の権利を求める社会批判。
- エ クルマやファミレスなどの小道具。

問7 Bにあてはまる一文として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 見かけ上の自由がたっぷり与えられていることこそが実は不自由なのだ
- イ 自由が現代社会で本当に問題なのか、よくわからない
- ウ 自由とはなにか、言葉の意味から考え直さねばならない
- エ 自由を実現することが大切なのではなく、自由であることとで何をすることが問題なのである

問8 線④「そのような感覚も理屈も」とありますが、どのような「感覚」と「理屈」ですか。それを説明した次の文のX・Yにあてはまる部分を、それぞれ指定された字数で文中からぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

X(十三字) という感覚と、
Y(二十九字) という理屈。

問9 線⑤「このこと」とありますが、どういうことですか。「〜ということ」につながるように、文中から十一字でぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

問10 本文の内容に合うものを次の中から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 今日、多くの人が自由の実現を大切だと思っている。
- イ 自由というものに価値を見いだすのは若者の特権であり、他の世代の人々には見られない特徴である。
- ウ 現在の日本の大きな問題点は、道徳や規範の崩壊という点にある。
- エ われわれが生きているこの社会は、人間の自由を抑圧するものでなければならぬ。
- オ 現代社会では、自由に対し関心を持たなくなっていることが、様々な問題と関連している。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「きみ」（和泉恵美）は、十歳の誕生日を迎えてから数日後のある日、友だち五人とあいあい傘をして歩いていたら、水たまりをよけようとしてバランスを崩した集団から「きみ」がはじき出されてしまったため、前方をひとりぼっちで歩いていたら「由香ちゃん」の傘に入れてもらおうと近づいて行った。しかしその時、勢いにつきすぎて車道に出てしまい交通事故に遭ってしまった。「きみ」は傘に入ってきた友だちを恨み、責め立てて悪口を言いつのつた。そして、「きみ」のまわりから友だちは離れていき、友だちがいなくなってしまう。一年後、十一歳の誕生日プレゼントは新しい松葉杖だった。

誕生日の翌日の学級会で、男女に分かれてなわとび大会の話し合いをした。失敗せずに何人つづけて跳べるかをクラス対抗で競う、学期末恒例の大会だ。五年生の一学期は、クラス替えして初めての大会ということになる。

いい記録を出すには、跳び手のがんばりはもちろん、回し手の息の合い方やなわを回すうまさも欠かせない。速すぎず遅すぎずの一定のテンポでなわを回しながら、みんなが疲れてくると微妙に速さをゆるめたり、跳び手ごとに好みのテンポに合わせたり……そうやって、うまく記録が伸びれば百回以上も、跳び手と違って途中で休むこともできずになわを回しつづけるのだ。

だから、どこのクラスも、回し手はスポーツの得意な子が担当していた。仲良しで息の合うコンビがいいし、できれば背丈も揃えたほうがいい。身長に差があると、なわを回してつくる

輪が傾いてしまい、それをまっすぐにするためになわを持つ手を不自然な高さにすると、すぐに疲れて、同じテンポを保てなくなってしまう。

でも、① きみのクラスでは、回し手のメンバーを選ぶことはできなかった。

「一人は決まりだよね……」

クラスの女子でいちばんいばっている万里ちゃんが、つまらなそうに言った。「だって、なわとびできないんだもんねー、しょうがないよねー」と、ひらべったくねばついた声でつづけて、話し合いの輪のいちばん外にいるきみを振り向いて、「跳べないでしょ、どうせ」と答えのわかっていることを——わかっているから、訊いた。

底意地の悪い子だ。四月に初めて同じクラスになったときから嫌いだ。向こうもそうなのだろう、なにをやっても、こつちがなにも言わなくても、いちいち突っかかってくる。

② きみは黙ってそっぽを向いた。後ろの席に立ってかけていた新しい松葉杖の置き方を直すふりをして、

A。

「じゃあ、万里ちゃん、あと一人は？」

堀田ちゃんが訊いた。「話し合い」ではなく「万里ちゃんが決める」集まりになっている。堀田ちゃんのように万里ちゃんに※媚びる子がいるから、そうなるってしまう。堀田ちゃんも嫌いだ。去年の誕生日には家に招いた一人だった。でも、いまは嫌いだ。堀田ちゃんは、昨日がわたしの誕生日だったってこと、覚えていただろうか……？

「由香ちゃんしかいないんじゃないですかあ？」と万里ちゃんは大げさなため息をついた。みんなも「やだあ」と笑う。

由香ちゃんは、きみと同じようにみんなの輪のいちばん外にいて、きみとは逆に申し訳なさそうにうつむいた。ふだんは色

白の顔を赤くして、太った体をしょんぼりと縮める。でも、しかたない。きみが万里ちゃんでも、由香ちゃんを回し手にする。運動が全然できない子が跳び手になったら、順番が回ってきたところで、記録は途切れてしまう。

「あーあ、ウチらのクラスって、すっごい損してるよねー。もう絶対に優勝できないよ」

万里ちゃんが言った。すかさず堀田ちゃんが、「万里ちゃんが一人で十回つづけて跳べれば優勝できるのにね」とご機嫌をとる。

「じゃ、そういうことで、回し手は決定でいいよね」

真っ先に拍手をして「さんせーい」と言ったのも、堀田ちゃんだった。

「次は跳び手の順番決めまーす。回し手のひとは関係ないから参加しないでくださーい。回し手同士で仲良く話し合ってくださいーい」

みんなは困った顔で、小さく笑った。きみと目が合わないようにうつつむいてしまう子もいた。さすがに堀田ちゃんも今度は合いの手を入れなかった。

きみはまた③グリップを握りしめた。やっぱり、前の松葉杖よりずっと握りやすい。指先の力がきちんとグリップに伝わる。強く握る。それが歯を食いしばる代わりになる。

立ち上がる。みんなから離れた席に座った。由香ちゃんもこっちを見ていた。あいかわらず申し訳なさそうな顔で、わたしなんかとコンビになってごめんなさい、と謝っているみたいだった。

おいでよ、と手で呼んだ。笑って迎えることはできなかったが、B。四月に由香ちゃんと同じクラスになったとき、ほんとうは、少しうれしかった。なぜかはわからない。事故に遭

う前だったら④そんなことは思わなかったはずだ、ということだけ、わかる。

そもそも、なぜあの日、由香ちゃんの傘に入ろうとしたのだろう。いままでしゃべったこともないのに、断られるかもしれない、とは考えなかった。たとえ傘に入れてもらってもなにを話せばいいのかわからなかったのに、なんとかなる、と思っていた。

なにより——入院中、あれほど友だちを責め立てて、しまいには「傘持って行けて言ったからだよ！」と事故をお母さんのせいにならしたきみなのに、由香ちゃんが悪いんだとは一度も思わなかった。それがいまでも不思議だ。

きみの隣の席に座った由香ちゃんは、まず最初に「失敗したらごめんね」と、「もしも」の話ではなく、もう実際に失敗してしまっただけみたいな顔で言った。

「別にいいよ、こんなの勝たなくてもいいし」

きみはそっけなく言った。事故を境に、そんなしゃべり方をするようになった。

「歩けないからスネてるんだよねー」と、いつか万里ちゃんに⑤聞こえよがしに言われたことがある。こいつ、全然わかってない、とC。

「和泉さん」——由香ちゃんはきみを苗字で呼んで、「練習どうする？ 今日、晴れてるし、一人で特訓する？」とつづけた。考える間もなく「しない」と答えると、またしょんぼりと、申し訳なさそうにうつつむいてしまう。

二人で話をしたことは、いままでなかった。由香ちゃんがクラスの誰かと話しているところも、ほとんど見たことがない。四月からずっと気になっていた。でも、話しかけるタイミング

が見つからなかつた。事故に遭つたあの日は平気で駆けて行けたのに、いまはなにをしゃべればいいのか決めないといけない気がして、それが見つかからないから話しかけられない。

由香ちゃんはどうつむいたまま、顔を上げない。

「だって、どうせみんな練習するんじゃない」——きみの口調はつい言い訳めいてしまう。

「でも……そのときにうまく回せないと、みんなに悪いし」

「関係ないよ、そんなの」

D。由香ちゃんが「みんな」を気づかうのが嫌だつた。

「みんな」は信じない。きみはいつも思う。「みんなと仲良く」なんて、そんなの嘘だ。傘に入れるのは一人、せいぜい二人。友だちだから、と無理して五人も傘に入れることはなかつた。あの五人の中で、すっごく仲良し、という子は一人もいなかった。こっちの肩が雨に濡れてもいいから、この子だつたら傘に入れてあげたい、入ってほしい……そんな子は、よく考えてみたら、友だちの中には誰もいなかった。

だから、もう「みんな」とはしゃべらない。「みんなの中のだれか」が話しかけても、愛想笑いは浮かべない。そう決めて、それを実行して、「みんな」は愛想笑いを浮かべない子には話しかけてこないんだな、と知つた。

⑤ しばらく沈黙が続いたあと、やつと由香ちゃんは顔を上げて、遠慮がちに言つた。

「……和泉さんって、昨日、誕生日だった……よね？」

「なんで知つてんの？」

「クラス名簿に出たから」

「って、四月につくつたやつ？」

「そう……みんなの誕生日、カレンダーに書いたから……で、昨日、和泉さんの誕生日なんだなあ、って」

「なんで？　なんでそんなのカレンダーに書いてんの？」

「……ごめん」

「違うって、怒ってるんじゃないかって、なんで？」

由香ちゃんは顔を赤くして、そうでなくてもか細い声をさらに小さくして、「病院のまね」と言つた。きみが入院していたのと同じ、大病院のことだつた。小学校に上がる前の由香ちゃんは、小児病棟にずっと入院していた。由香ちゃんのような幼稚園児から小学六年生まで、ほとんどが長期入院の子どもで、病院の中には小学校も特別に設けられていた。

『「お友だちの部屋」』って呼んでた部屋があつたの。黒板とか机とか本棚とかテレビがあつて、小学生の子はそこで勉強もするんだけど、ちっちゃな子も具合のいいときには、自由に入つて遊べるの」

そんな部屋があるなんて、きみは知らなかつた。整形外科の病棟と小児病棟は広い敷地の端と端だつたし、松葉杖の練習で中庭を散歩していたときにも、子どもの入院患者の姿はめつたに見なかつた。中庭に出られないぐらい病気の重い子が多かつたつてことなのかなと、いま思つた。

『「お友だちの部屋」』には、看護師さんが手作りした大きなカレンダーが貼つてあつた。そこには入院中の子ども全員の誕生日が書き込まれていて、誰かの誕生日には、ベッドから出られる子はみんな『「お友だちの部屋」』に集まつてお誕生日会をする。

「看護師さんやお医者さんが人形劇してくれたり、手作りのプレゼントくれたり、歌をうたつてくれたりするだけなんだけど、それがすごく楽しみだつたの、みんな。カレンダーめくつて、あと何日、あと何日……って」

その頃のことを思い出したのか、⑥ 由香ちゃんはうれしそうに、初めて笑つた。

きみは——正直、ちよつとあきれて、「そのまねしてんの？」と訊いた。

「うん……」

「でも、全然違うじゃん。べつにお誕生日会なんかしないし、一緒に入院とかしてたら、それはまあ、友だちっぽい感じになると思うけど……でも、全然違うじゃん」

由香ちゃんは、またしよんぼりとして、「ごめん……」とうつむきそうになった。

「違う違う、怒ってないって」

あわてて言ったきみは、「でもわかるよ、なんとなく、その気持ち」と笑って、なんで気をつかって慰めてるんだろかなあ、とE。

由香ちゃんは気を取り直すように、ふう、と息をついて、きみに言った。

「和泉さん、誕生日おめでとう」

家族以外からもらった唯一の「おめでとう」だった。

きみは思わずそっぽを向いて、二回深呼吸をして、言った。

「ちよつとだけ、特訓しようか」

由香ちゃんが笑ったのが気配でわかった。まんまるでやわらかい笑顔だった。

「あとさあ……苗字で呼ばなくていいから。『さん』付けも嫌いだし」

そう言ったあと、急に⑥手持ちぶさたになって、松葉杖のグリップをつかんだ。ギュツと握りしめると、手のひらや指は痛くなったのに、⑦背中がくすぐったくてしかたなかった。

（重松清 『きみの友だち』 一部改変）

※（文中のことばの意味）

媚びる …… 相手の機嫌をとって、気に入られるように振るまう。

問1

線①・②の線③・④のことばについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 聞こえよがし

ア まるで聞こえたかのように

イ まったく聞こえもしないのに

ウ うっかり聞こえてしまいそうに

エ わざと聞こえるように

② 手持ちぶさたになって

ア 両手が空いてしまつて

イ どうしていいかわからなくなつて

ウ やる気がわいてきて

エ 気分がよくなつて

問2 ———線①「きみのクラスでは、回し手のメンバーを選ぶことはできなかった」とありますが、なぜですか。その理由として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 万里ちゃんと堀田ちゃんが勝手に決めてしまうから。
- イ スポーツが得意な子に譲ることになっているから。
- ウ クラスで話し合わずに万里ちゃんが決めてしまうから。
- エ 足の悪いきみと太った堀田ちゃんに決まっていたから。

問3 ———線②「きみは黙ってそっぽを向いた」とありますが、なぜですか。その理由として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 万里ちゃんとは話し合いにならないので由香ちゃんに助けを求めたかったから。
- イ 相手にしてもらえないのは悲しいが万里ちゃん他にも友だちがいるから。
- ウ 自分の感情を押し殺して黙ることによって万里ちゃんと言い争わずにすむから。
- エ いちいち突っかかってくる万里ちゃんの言動に腹が立ち相手にしたくなかったから。

問4

A

E

 にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ちよつと腹が立った
- イ 今度は自分に向けて苦笑した
- ウ グリップをそつと握りしめた
- エ そっぽを向いて冷ややかに笑ってやった
- オ そっぽは向かなかった

問5 ———線③「グリップを握りしめた」について、次の問いに答えなさい。

- (1) この時の「きみ」はどのような気持ちだと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 勝手に回し手に決められた上に、人の感情を逆なでする万里ちゃんにいら立つ気持ち。
 - イ 勝手に回し手に決められた上に、由香ちゃんと組まされることに納得できず激怒する気持ち。
 - ウ 勝手に回し手に決められたのは仕方ないが、跳びたくても跳べない自分を情けなく思う気持ち。
 - エ 勝手に回し手に決められたのは仕方ないが、みんなと話し合うことができず悲しむ気持ち。

(2) そのような行動をとったのはなぜですか。「くから」につながるように文中から十三字でぬき出しなさい。

問6 線④「そんなこと」の内容を、文中のことばを使って三十文字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えま

問7 線⑤「しばらく沈黙が続いたあと、やっと由香ちゃんは顔を上げて、遠慮がちに言った」とありますが、「由香ちゃん」が「遠慮」していたのはなぜですか。その答えにあたる次の文の a・b にあてはまる最もふさわしいことばをそれぞれ文中からぬき出しなさい。

きみと回し手のコンビになったことを a なく思い、さらに、 b の誘いを断るようなきみの態度に気がつかっていたから。

問8 線⑥「由香ちゃんはうれしそう」とありますが、なぜですか。その理由として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 『お友だちの部屋』のカレンダーに書き込んだ「きみ」の誕生日を、みんなでお祝いすることができたから。
イ これまで話したことがなかった『お友だちの部屋』について、「きみ」に話すことができたから。
ウ 重病者が利用する『お友だちの部屋』に出入りするほどの病気だったが、退院するほどまでに回復できたから。
エ 入院中に『お友だちの部屋』に集まって、みんなの誕生日会をしていた頃のことを思い出したから。

問9 にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 肌を刺す木枯らしがさつと髪をなでるような
イ たんぼほの綿毛がふわつと舞い上がるような
ウ 太陽がぎらぎらと照りつけるような
エ ボールがぼんぼんと地面を跳ねるような

問10

——線⑦「背中がくすぐったくてしかたなかった」とありますが、この時の「きみ」の気持ちとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 照れくさい イ もどかしい
ウ いじらしい エ うつとうしい

問11

本文に登場する人物の説明としてふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「きみ」は、事故をきっかけに友だちを失ったが、うわべだけでしかつながらない友だちばかりだったから、それでよいと思っている。
- イ 「万里ちゃん」は、「きみ」に不必要に突っかかってきて、「きみ」が嫌がるようなことも平気で口にする底意地の悪さが目立った。
- ウ 「堀田ちゃん」は、「万里ちゃん」のご機嫌をとるところが原因で「みんな」から嫌われていて、「きみ」が仲間はずれにされても何も感じなかった。
- エ 「由香ちゃん」は、うつむきかげんで自信がなさそうにしていることが多いが、「きみ」の誕生日の話になると入院中の思い出を語りだし笑顔を見せた。

三 次の□にあてはまることばとして、最もふさわしいものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

- ① 私と彼女は非常に親しく、気の□友人といえます。
- ② 君の考え方は□の空論にすぎない。
- ③ 彼にその仕事を任せるのは少し□ではないか。
- ④ 日本のスポーツ界の将来性を□で討論する。
- ⑤ 私の□のために残念な結果となってしまった。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|------------------------|---|------|
| ア | 口上 | イ | 紙上 | ウ | 机上 <small>きじょう</small> | エ | 過不足 |
| オ | 力不足 | カ | 役不足 | キ | おける | ク | おけない |
| ケ | ひける | コ | ひけない | | | | |

四 次の——線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 一件ラクチャク。
- ② この計画はダサンぬきにして考えよう。
- ③ 問題がサンセキしている。
- ④ 今日のお風呂のお湯がアツい。
- ⑤ 人工エイセイの打ち上げ。
- ⑥ 治水工事でダムを造る。
- ⑦ 枚挙にいとまがない。
- ⑧ 伊勢で首脳会議が開かれた。
- ⑨ ミツバチが巢すに群がる。
- ⑩ 結論を導き出す。

これで問題は終わりです。